

現在、きらきら(2~5歳児)では、空前のけん玉ブームです。劇場ごっこの取り組みから始まった忍者修行の盛り上がりとともに、けん玉も修行の一つになっているようです。寸暇を惜しんで、けん玉の練習をしていて、保育室にあるけん玉だけでは足りず、事務室に置いている私のけん玉まで借りに来て、事務室で、「モシカメ」「野球」「剣先」など、できるようになった技を次々披露していくほどです。

数年前に、コマが流行った時も名人が次々に生まれましたが、今回のけん玉でもやはり、大人顔負けの名人が生まれつつあります。そして、コマのときも、今回のけん玉でも、「まだちょっと難しいだろう」と思われる3歳児の子どもたちでさえも、お兄ちゃんお姉ちゃんのまねをして繰り返しチャレンジしていて、それなりにできるようになっていくことに驚きます。

やはり、子どもたちが(子どもに限らずなのでしょうが)、何か力をつけていくためには、「やりたい!」「できるようになりたい!」という意欲がとても大事なんだと改めて思いました。

この「意欲」について考えるとき、必ず思い出す話があります。ずっと以前に講演会で聴いた話ですが、太田 堯(おおた たかし)先生の「人間はなぜ二本足で歩くようになったのか」という話です。

太田先生がまだ教壇に立っておられた頃のこと、授業中に生徒から、「人間は進化する過程で、なぜ二足歩行をするようになったのか」と質問されたことがあり、即答できずに生徒に「考えてくるから時間をくれ」と頼んだことがあったのだそうです。

太田先生は「4つ足で歩いていた人間が体重を後ろ脚に乗せることにより、上体が立ちあがり、前足(手)が自由に使えるようになって、手を使うことによって脳の機能が発達し、道具を扱うようになり、言語も使うようになっていった」というプロセスはわかっていましたが、そもそもの「なぜ立って歩くようになったのか」という本質的な問いに対する答えをなかなか見つけることができなかったそうです。いろいろ調べて、ずっと考えて、ようやく太田先生が生徒に回答するために、たどり着いた答えは…「人間が『その気』になったから。」

2本足で立って歩くためには、「2本足で立ってやる!」という強い意志が必要であり、さらに2本足で歩き続けるためには、「その気」になり続けていなければ、倒れたり、つまづいたりしてしまうのです。裏を返せば、いくら条件が整っていたとしても、人間が「その気」にならなければ、人間は2本足で立って歩くようにはならなかっただろうということです。

本人が「その気になる事が大事」当たり前のことのようにでありながら、つい見落としがちなことです。「やってみたい」「できるようになりたい」という意思の強さ、「意欲」こそが、能力を伸ばしていく原動力なのです。子どもにとっては、やはり「楽しい」とか、練習していて少しずつでも上達していく「うれしさ」そういったものが、その意欲を後押ししていくのでしょう。

けん玉やコマ、あやとり、お手玉などなど、昔ながらの遊びは、近年の電子ゲーム類に比べたら安価で、しかも、アイテムを買い足していく必要もなく、それでいて、そのものだけで単純な遊びから複雑な遊びへ発展させることもでき、また1人でも遊べて、複数人でも楽しめて、手や頭も使って…と良いことづくめ。今更ながら、すごいなあと思います。

子ども達のけん玉ブームに乗かって、おうちのみなさんもけん玉始めてみませんか？

※ もしも、これからけん玉を購入される機会がありましたら、
「日本けん玉協会認定競技用けん玉」をおすすめします。

